



趣味を通じた生きがいがづくり

# 十人十色

松澤 等さん  
会社員

【まつざわ・ひとし】1969年船橋市生まれ。オーストラリア留学中に、偶然エクストリームアイロニングのことを知り、帰国後エクストリームアイロニングジャパンを設立。様々なスポーツとアイロン掛けの組み合わせに挑戦している。



Vol. 5  
エクストリーム  
アイロニング

## 大自然の中で楽しむアイロン掛け



—「エクストリームアイロニング」(以下「EI」)とは、どのようなスポーツですか。

普段からアイロン掛けを充分に楽しんでいて、かつ登山のような野外スポーツにも動んでいる方が、野外環境をより楽しむために好きなアイロン掛けを持ち込み、さらなる達成感や満足感または癒しなどを得る事を主目的とする行為、それがEIの基本的な在り方です。

—どのようなきっかけでEIを知りましたか。

オーストラリアに住んでいた1998年、山の上でEIをしている人をTVニュースで観て知りました。単純に「バカだなあ」と思いましたが、その人がまるでふざけたようにアイロン掛けのポーズをしていたので、「僕の方がよほど上手くできるなあ」とも思いました。



高められた達成感を、アイロン掛けによって山へ納める

—実際にEIをやり始めたのは、いつからですか。

帰国して新しく日本の電圧に合うアイロンを買いに行った際、「そういえば山でやっていたやつがいたなあ」と思い出し、「ならば僕も山にアイロンを持って行って、記念写真でも撮ろうか」などと考え、初めて山に持ち込んだのが2004年の9月です。この時は完全にふざけた気持ちしかありませんでした。

—EIならではの魅力とは何でしょうか。

本格的にやると、思いのほか高いレベルの達成感や満足感を得られることです。山に登った達成感に、アイロン掛けでシワを伸ばす達成感が加わると、ただ山に登った時よりも高い達成感を得ます。さらにその高揚した気持ちを、

アイロン掛けを通して山に納めているといった癒しの感覚も得る事ができるのが面白いと思います。

—アイロンの電源は何処から取っていますか。

水中で電源は入れていますか。

山ではガスバーナーでじかにアイロンを熱して温め、蓄熱させた上でやっています。そのため現在山で使用しているアイロンのほとんどは、直火蓄熱に耐えうるアンティークアイロンです。山小屋から電源を借りる事もあります。

僕がEIを始めた当初、水中はEIをやっている世界の方々への仲間入りをするための登竜門的な場所でしたが、現在では、EIとはスポーツ性とアイロン掛けの成立が欠かせないものであるというガイドラインができたので、電源取得不可の水中掛けは絶対的にタブーとなっています。

—通常の家事としてのアイロン掛けは好きですか。

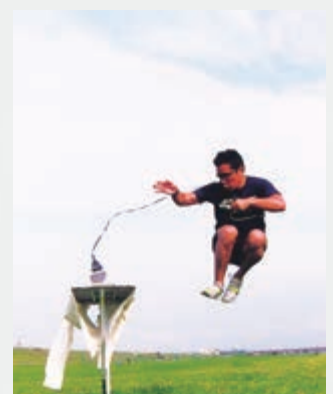
無論です。それがEIの基本であり、その楽しさがわからなければ山でアイロンを掛けても何も感じないと思います。

—松澤さんにとって、EIとは何ですか。

スパイスです。山やスポーツをさらに美味しくするためのスパイス。日常という料理の味にさらなるパンチを効かすためのスパイスです。なくてはならないものではありませんが、あれば有効に使って楽しみたいものです。

—今後の目標はありますか。

僕らの活動を通して、楽しくアイロン掛けをする人が増えたら嬉しいですね。やり方次第ではヒーリングやエクササイズ、またはスポーツとしても楽しめるので、「男の料理」という言葉が浸透したように、いつか僕らがきっかけとなって「男のアイロン掛け」という言葉が定着すればいいなあと思っています。アスリートとしてEIを見据えた個人的な目標もありますが、それはまだ自分の胸の中だけに大切にしまっておきたいと思っています。



ジャンプしつつ、アイロンも手から離して行うオリジナルの荒技「ジャックナイフ・プレス」